Fukushima National College of Technology

ハイデガーの技術観

A View of Technology in Heidegger

（平成14年9月受理）

笠　井　　哲*（KASAI Akira）

Abstract

The purpose of this paper is to consider the view of technology in Heidegger.

The technology is in the domain of the truth. Heidegger identifies the technology with the manifestation of the truth.The modern technology is also the manifestation of the truth.

Man makes the nature the object by the modern technology. Man discloses a secret of the nature in order to take out the wealth in front of him. In other words the manifestation of the modern technology appears in the object of nature. The autonomy of the modern technology exist in this kind of the process of the manifestation.

Heidegger calls all the setup of the modern technology the assembly (Gestell). We have free-dom to steer the technology. The freedom isn't the simple option. There isn't the doom, but the destiny in the technology.

Man doesn't escape from this reign of assembly. Heidegger's philosophy prompts to reflect the wishful thinking of the humanism.

1．はじめに

現代は、技術の時代であるといえる。技術とは普通、科学を実地に応用し、自然力を開発したり利用したりするわざのことと解されている。そして、このような近代技術により特徴づけられる時代が始まったのが、ハイデガーの生まれた19世紀後半であった。

技術は、目的に対する手段に過ぎないのであろうか。製作活動は、良き行為のための手段を提供する行為であり、それ自身は善悪に無関係な第二次的実践に過ぎないのであろうか。

確かにアリストテレスは、

> 制作には制作［活動］と異なる目的があるが、行為にはそのような目的はないだろう。なぜなら、良い行為はそれ自体行為の目的だからである[1]。

といっている。技術による製作活動は、それ自身を目的とせず、制作活動の結果生ずる技術的産物が、その目的とされる。こうして得られる技術的産物が、良き行為のための手段として適切であるか否かということで、その製作活動の是非が決定される。技術も可能性から見れば、「分別の働きを伴う制作の性能」[2] であるから、普遍的な認識能力を必要とし、科学的知識につながる方向を持っている。その具体的適用を、行為の善悪に関する実践的な智恵（賢慮）に依拠する点からすると、技術的活動それ自身はどこまでも手段的・相対的な地位にとどまる。

以上のような伝統的な技術観から、技術の実践的な無記性・価値中立性という発想が生じてくる。例えば、現代の科学・技術がもたらす巨大で多様な災厄に対して、科学と技術そのものにはこのような害をなす原因は内在せず、それを使用する人間の側にこそ問題があるという考え方がある。つまり、このように発達した科学・技術を使いこなしうる政治的・行政的知識の欠如や、倫理・道徳の未発達といった実践的知恵の欠陥に災厄の原因を求める。そして科学・技術そのものは、善悪いずれの方向へも使用可能な中立的道具であると見るのである。

この立場に対立するのが、科学・技術のもたらした災厄の原因を科学・技術そのものに求める現代の「科学批判」の立場である。しかし、科学・技術の災厄の原因とこれを克服する道を、人間の実践的知恵の側に求めるか、それとも科学・技術の内的本質に求めるかで単純に問を立てるなら、そのいずれの選択肢も誤りである。なぜならば、いずれの道も、科学・技術の活動と実践的行為との二元論を前提としており、その二元論のいずれか一方にのみ原因究明の舞台を限定して

*：福島工業高等専門学校　一般教科（社会）（いわき市平上荒川字長尾30）

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

いるからである。

この二元論は、いわゆる理論と実践の二元論とは異なるが、これを土台として組み立てた二元論であるので、理論にも実践にも足を踏み入れて成立する科学・技術の活動の全体を、一体のものとして考察することを本質的に妨げてしまう。

我々は、現代の科学・技術の問題を、その普遍的な発展の論理から理論的に考察することについて、また科学・技術を道具として使用する人間の普遍的な倫理の問題として解明することについても、いずれも否定しない。しかし、科学・技術の具体的活動が、つねに道具の使用と製作とにかかわるその都度の行為的現実である限り、その現実を超越した普遍との関係からのみ現実を基礎づける理論的考察も倫理的解明も、共に現実の二次的・一面的な説明である。最初に取るべき考察の立脚点は、科学・技術の活動が経験されるままの全体性の分析でなければならない。

本稿の目的は、以上の問題に対する一つの解答を探るために、ハイデガーの『技術への問い』[3] を中心に、彼の技術観を考察することである。

2．発　　露

まず、『技術への問い』を概観しておきたい。ハイデガーは、技術の「現存在」と「本性」との関係を規定しているものは何か、について注意している。

> 技術と技術の本性とは同じものではない[4]。

技術の「本性」とは、技術である限りの技術のすべてを「統べる」ものであるはずである。

技術とは、ひとまず、そのただ中で人間が何らかの目的に向けて行為を営む「その整備・組織の全体」であると考えられる。あるいは、

> 技術そのものが一つの整備・組織であり、ラテン語でいう「instrumentum」である[5]。

ハイデガーにおいて、この技術概念は、たとえ近代的科学技術の場合であっても、有効である。

彼の眼差しは、さらに遠くまで及んでいる。彼はさらに深い問いを提出する。技術を「制御しようとする意志」は、一体どこへ行くのか。この意志の主体は何か。何によってそれは導かれるのか。

ハイデガーはこの問題に、アリストテレスのいう四原因の現象学的分析という方法を通じて着手する。四原因は、ハイデガーの分析によれば、「何かあるものを明るみ［現れ］のなかへ持ち来たす」四つの様態に対応している。それら四つの様態は、その或るものが現出する働きの四つの固有の仕方に応答している。

いま、一個の聖餐用の銀の供物皿という例を取ってみよう。第一に、この皿が銀という材料でできあがっているものである限りにおいて、銀はこの皿に関して、①質料因として「ともどもに責めを負っている」といわれる。第二に、それが皿として、すなわち皿という外観のもとに現れ出るものである限りにおいて、同じ銀はこの皿の形（見え方）にやはり②形相因として、「ともどもに責めを負っている」といわれる。第三に、それが何らかの目的に供されるものとして、すなわち供物の器である限りにおいて、さらにその皿の用途という要因が同じ皿に関して、③目的因として「ともどもに責めを負っている」。

しかし、第四の要因は銀細工師その人でありうるか。

> 銀細工師は、上述の三つの責めの負い方を、熟考して纏めるのである[6]。

ハイデガーは、いっている。

> 熟考するとは、ギリシア語で légeìn, lógos と呼んでいる。それは apophaínesthai すなわち明るみに持ち来たすと言うことにある[7]。

銀細工師の熟考のおかげで、一個の皿を生み出す因果性の三様態が互いに共働することが可能になる。銀細工師は、それゆえにこの皿の生産に、銀や皿の形やその用途と「責めをともどもに負っている」。しかし、それはただ単にいわゆる③作用因として、そうであるというのではなくて、

> 供物皿を連れ出し独立させてゆくその最初の発端を得しめ維持せしめるものとして、責めをともどもに負っているのである[8]。

ここで、聖餐用の供物皿の現－存 An-wesen が、生－産（出で－来－たらすこと）としてとらえられる。この聖餐用の供物皿の現存にともどもに責めを負っている因果性のそれぞれの様態を取り纏めつつ、銀細工師はこの皿をその「現れ」へと産出する。この皿が独存し、顕現し始め、そうして現れの世界へ、すなわちその「現－存 An-wesen」へと到来するのは、この銀細工師を端緒にしてである。

「生－産（出で－来－たらすこと）」とは、ハイデガーによると、その本義においては、現存するものを明るみに持ち来たす、一種の持ち来たしのことである。これがギリシアのポイエーシス（製作）であった。それは、

> 現存していないものから現存するものへ移り－出て－来るために誘い出すこと[9]

である。

しかし、銀細工師が実際に銀の皿を作り、その「現れ」へ産出するということは、彼自身がこの皿の生産の「作用因」であるということではないか。だが、ハ

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

イデガーによると、そうではない。彼は、単にその契機として働いているに過ぎないのである。一個の皿の製作過程に従事しながら、銀細工師は真理の産出過程に参与している。この一般的過程の内部で四つの誘因が共演している。つまり、一々の物の個別的生産に従って「蔽われている状態から蔽われていない状態へ到る」真理を「露わに発く」製作の個別的過程が共演しているのである。

技術の現存在とその本性とを取り結ぶ関係の本質は、それゆえにこの「発露」(Entbergen) のうちに存していることになる。これが、一見、一個の皿の生産の因果的諸関係を実際に取り纏め統べているかに見える銀細工師の行為の根底にあって、それを支配しているものなのである。

> したがって、技術は露わに発く一つの在り方である[10]。

技術の領域、それは「真理の領域なのである」。ハイデガーは技術を真理の「発露」に同定する。

> テクネーは、alētheúein［アレテーウェーン、露わに発く］の一つの在り方である。それは自分自身で出で－来たらず未だ眼前にはなきもの、従って色とりどりな見え方をとって結末をつけるであろうものを、露わに発くものである[11]。

それでは、自然の産出過程と職人の生産過程とは、どのように区別されるのか。自然の創造作用においては、例えば花は自分自身で花開くのに対して、職人ないし技術家の生産過程においては、事物は自分自身では完成しない。だから、私たちは私たちの手で、事物を光の前－面に引き出す必要があるのであり、それこそが人の技としての技術なのである。

3．挑　　発

次いで、ハイデガーは近代技術が何かを問う。その本性に関して、近代技術もまた「発露」である。「しかし」と彼はいう。

> 近代技術を支配しているこの露に発くということは、しかし今ではポイエシスの意味における出で－来－たらしの形で展開されているのではない。近代技術のなかで統べている露わな発きとは、自然にむかって、エネルギーとして搬出され貯蔵されるような、エネルギーを供給すべき要求を押し立てる挑発なのである[12]。

我々の時代を統べる「発露」の特徴的性格は、ハイデガーに照らしていえば、自然を「立て挙げる stellt」「挑発する Herausfordern」である。

近代技術は二重の意味において自然を「挑発する」。まず第一に、近代技術は、自然を「打ち開いて、そして外へ立て」る。そして第二に、近代技術において自然は、

> 最小限の消費で最大限の利用へと前進的に駆り立ててゆくように、あらかじめ目安が立てられている[13]。

ここに近代技術の特徴が、さらに明瞭になってくる。「打ち開き」「外へ立てる」こと、すなわち人間は近代技術という手筈によって自然を客観化（対象化）し、自らの眼差しの前に引き出して、その秘密をそこから富を引き出すために暴露するのである。

ハイデガーは、物事の隠れた真理を大切にして、それを明るみに＜持ち来たらすこと＞という意味での芸術的製作と、近代技術が隠れている物を引っ立てて探し出すということとは違うという。どちらにしても、隠れているものの覆いを外して明るみに出すことに違いはない。

例えばヴァイオリンを作るとき、その素材の中に含まれる「よい音を出す素質」が最大限に発揮されるようにする。そのものの本来のあり様を過不足なく引き出すこと、それが製作の極意である。近代技術は、素材の持つ本来の在り方などはどうでもよいことである。一定量のエネルギーなり、一定の強度を保つ塊があればよいのである。

すると、こういう質問が出てくるであろう。

> このことはしかし、昔の水車にもいえるのではないか。そうではない。風車の翼はなるほど風に廻され、その吹きつけに直接委ねられたままである。風車はしかし、エネルギーを貯蔵するために、その気流のエネルギーを開発しはしない。
>
> それに反して、ある地帯は、石炭や鉱石の採掘のために挑発されれる。その地域は今や地面は石炭の鉱区として採掘される。畑は姿を変えてしまう。かつては農夫の手入れと言えば、育てたり、面倒を見たりすることだった。農夫の仕事は畑を強いて作物を産み出させたりはしない。種を蒔いて、芽が出れば成長力のお陰だと思い、その成長を見守るのである。今となっては畑の手入れも変わり果て、自然を強いる手入れとなっている。強要という意味で自然を強いるのだ。農業は今では動力化された食品産業である。空気は窒素を出せと引っ立てられ、土壌は鉱石を、鉱石はウランを、ウランは、破壊のためにせよ平和利用のためにせよ放出される原子力エネルギーを出せと引っ立てられる[14]。

自然を引っ立てて、資源を出せと取り立てて、採掘

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

するというのが、近代技術である。ここではドイツ語のシュテレン（stellen）という動詞を語源に持つ言葉がふんだんに使われている。シュテレンとは、もともと、まったくありふれた意味で地面の上で横倒しになっているものを垂直にするというのが、中心的な意味である。

しかし、そこから「追い立てる」、「取り立てる」、「責め立てる」といった不自然で一方的な強制という語感を持つ複合語が出てくる。ハイデガーが目をつけていたのも、この意味での「～立てる」である。

我々の時代の技術を統べる「発露」の特徴的性格は、ハイデガーの用語法に照らしていえば、自然を「立て挙げる」、つまり「挑発」である。

> 近代技術を隅々まで支配している露わな発きは、挑発の意味において立たせるという性格をもっている。挑発がなされるのは、自然の中に匿されているエネルギーが開発され、その開発されたものが変形され、その変形されたものが貯蔵され、その貯蔵されたものがさらに分配され、その分配されたものが新たに転換される[15]。

ことによって、この「挑発」は成されるとハイデガーはいう。これは、自然の過程化である。

> 開発、変形、貯蔵、分配、転換は、露わに発くことの在り方である[16]。

つまり、近代技術の「発露」とは、自然を客観化（対象化）することを通して過程化することのうちに現れてくるのである。この種の「発露」の過程性に、近代技術の自律性が存している。

> 露わに発くことは、自分の独自な、さまざまに咬み合ってゆくあまたな道を、みずから制御することによって、自分自身に露わに示すのである[17]。

こうして、近代技術の「発露」は、自分自身によって自己を実現する。というのも、それは自らの通るべき過程を、自分自身に固有の「理」を示すことによって、自らに提示できるからである。ハイデガーは、近代技術独特のこの自律的過程を、

> どこまでも役立ちのためにたつように、しかも次の仕立てのために、自分で用意して立っているように、仕立てられる[18]。

という言葉で表現している。

こうして、近代技術は独自の「立つ座」を持って、「役立つもの」として人間自身をもそこに含んでいる。確かに人間は、それによって近代技術が発展してゆく「発露」の実際の主体であるかも知れない。しかし、ハイデガーが指摘したように、それは「人間自身の方がすでに挑発されている限りにおいてのみ」可能なのである。人間もすでに近代技術の「蔽われのなさ」の中で「挑発され」ている。そして人間は、他の諸対象がそうである以上に、根源的な仕方で「挑発され」ている。それゆえ、

> 人間は、ここにいう仕立てへ向かって挑発されているが故にこそ、技術に携わることによって、露わに発く－在り方としての仕立てに参加するのである[19]。

さてハイデガーは、近代技術に固有のこうした「仕立て」の全体を「立て－組 Ge-stell」の名で呼ぶ。

> 立て－組とは、現実に役立つものとして仕立てる在り方において露わに発くように、人間を立たせる、すなわち挑発する、その立たせるということを纏めてゆくものを称するのである[20]。

また、次のようにもいう。

> 「立たせる」という語は、立て－組なる名目のなかで単に挑発だけを意味しているのではない。この語は同時に、そこからまた立たせることが派生してくるような、もう一つ他の「立たせること」への共鳴を蔵していなければならない[21]。

ハイデガーによれば、近代技術も結局、本来の技術に固有の「立たせること」から派生したものだということになる。それを共有しているからこそ、科学と技術は共働し、「科学技術」すなわち近代技術となることができたのである。

最後にハイデガーは、人間と技術の「立て－組」との関係を、人間と知との「命運」との関係への関連において規定しようと試みる。

> 私たちは、そもそも人間をこの露わな発きの途に就かせている、その纏めてゆく遣わしを「命運」と呼ぶ[22]。

また、次のようにもいう。

> 人間の行為は、命運的なものとして初めて歴史的と成るのである。そして、あらゆるものを対象化して描き立てる命運があって初めて、歴史的なるものは史学のために、すなわち一学問のために、対象となって取り扱われ得るのであって、またこのことによって初めて歴史的なるものと史学的なるものとの、あの慣用されている等置が可能になるのである[23]。

この意味では、技術も命運的なものとしての人間の行為の一分野である。それは、それゆえ客観化（対象化）の歴史に参与する一分野なのである。

4．立て－組（ゲシュテル）

ハイデガーに対して、「確かに近代技術は、自然を

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

破壊したり、汚染したり、荒廃させたりするかも知れないが、それは人間のためである」という反論が出る。

人間の仕業であることは確かであるが、それは本来の人間の在り方なのかとハイデガーは切り返す。

> ただし人間自身の方がすでに、自然エネルギーを搬出するように挑発されている限りにおいてのみ、かくのごとき仕立てゆく露わな発きが生起しうるのである。もし人間がかくのごとく挑発され、仕立てられているものなら、実に人間こそ自然よりもさらに根源的に、役立つものに属しているのではないか。人間資源とか、たとえば病院の臨床例とかに関する現今の流行語は、そのことに与みしている[24]。

人間自身が調達される資材となり、在庫品と見なされるようになってしまっているからこそ、その人間が自然から資材を調達するように仕向けられて、それを引き受けるのである。

すでに自分を見失ってしまった人間が、自然を強いて、自然から資源を取り立てるように駆り立てられる。人間の自己喪失こそが、自然破壊の根源なのである。だから「自然破壊も人間に奉仕している」とか、「人間のための自然破壊だからやむを得ない」とかの言い分は、すでに自己を失ってまがい物となってしまった「人間」のためでしかない。

それとは違う生き方がかつては存在した。

> 森の中で伐採された材木を測ったり、一見したところでは祖父と同様同じような仕方で森の道を巡ったりしている森番は、今日では彼がそれを知ろうと知るまいと、木材加工産業によって仕立てられているのである。彼は繊維素を仕立てうるように仕立てられ、その繊維素自体は新聞や読み物に当てがわれる紙の需要によって挑発されているのである。ところがこれらの新聞や読み物は、注文通りの意見設定が仕立てやすくなるために、印刷物を鵜呑みにするように世論を駆り立てる[25]。

単に資材を調達するだけでなく、世論とか、文化とかまで調達し、取り立てていくという、あらゆるものを駆り立て、取り立てている見えない力が働いている。ハイデガーは、誰かが私腹を肥やすために世論操作をしているというのではない。近代技術の文化の根底には、調達のための調達、取り立てのための取り立てという奇妙な性格があるというのである。

ハイデガーの見た近代技術社会では、あらゆる物事が「～立てる」（－シュテレン）という強制、利用、要求の関係で成り立っている。どこにも発信源はないのだから、「～立てる」が一人歩きしているようなものである。「取り立てる」（注文する、bestellen）、「引っ立てる（調達する ge-stellen）」、「喚び立てる（出頭を命ずる zustellen）」など、さまざまな「～立てる」がある。この目に見えない集団を、一つに纏めてハイデガーは、「立て－組」（ゲシュテル）と呼んでいる。

近代技術社会は、普通に写真を撮れば、工場や自動車やコンピュータは写るかも知れない。しかしその本質の映るレンズで見ると、「立て－組」が一人歩きしている光景である。

ドイツ語の「ゲシュテル」（Gestell）には、①台架、支持枠、骨組み、②（高炉の）炉床、③林道、④骨格、骸骨という意味がある[26]。形容詞の「ゲシュテルト」（gestellt）は、「わざとらしい」とか「作為的」という意味になる。

古東哲明は、ゲシュテルについて、次のように述べている。

> じつに特異で<変則的>な近代科学技術（以下テクノロジーとも表記）の「本質」を、ハイデガーはゲシュテルとなづける。「ゲシュテル」とは耳なれぬ言葉かもしれない。ドイツでは足場とか書架とかフレームを意味する日常語。だがさらに、ある独特のニュアンスをもつ。たとえば召集令状のことを、ゲシュテルンクス・ベフェール（Gestellugsbefehl）という。戦場へ借り出し、殺戮に駆り立て、追い立て、煽り立てる「強制的なフレーム」（Gestell）あって可能になる、出頭命令書のことである。
>
> そんな召集令状ともひびきあう、「追い立て、駆り立て、徴用する強制的な仕組み、ないし根源力」のことを、ハイデガーはゲシュテルと名づけ、それをテクノロジーの本質と言う[27]。

ハイデガーは、この意味での「ゲシュテル」が、同時に「取り立てる」とか「引っ立てる」というときの「～立てる」（－stellen）の集合名詞になっていることに注目し、あらゆる「取り立て」や「引っ立て」の中の共通要素を「ゲシュテル」と呼ぶ。

> 立て－組とは、現実に役立つものとして仕立てる在り方において露わに発くように、人間を立たせる、すなわち挑発する、その立たせるということを纏めてゆくものを称するのである。立て－組は露わに発くことの在り方を称するのであって、その在り方が近代技術のなかで統べているのであるが、それ自身何ら技術的なものではない。これに反して、私たちが台とか容器とか構架として知っているものや、また組立といわれているものの部品のすべてが、技術的なるものに属する。組立も

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

やはり、右にあげた構成部品とともに技術的労作の区域内に落ちるものであり、技術的労作は常にもっぱら立て－組の挑発に順応するだけであって、決してこの立て－組自体を成しているものでもなければ、また断じてそれを引き起こすものでもない[28]。

柱組み、コンクリート、足場というような建築現場の各部分、基礎工事、組立工事、仕上工事のような工事部門、さらに組立作業を構成する運搬、配置、ボルト締めなどの作業部門は、皆技術的なものである。「立て－組」が陰で支配しているから、これらが技術的なものとして割り振りを受けるので、「立て－組」自体は触媒の役割を果たすだけで、現場で見えるものではない。技術的なものを、技術的なものたらしめている陰の主役が「立て－組」なのである。

「立て－組」は、捨てるとか、追い出すとかすることができない。化学的な処理で、それを脱色することもできない。その存在にさえも気づかない。我々は、「立て－組」という空気の中に生息し、それを吸い込んでいる。我々が何かに駆り立てられたり、計画を立てたり、希望を抱いたりするときにはいつも「立て－組」が陰で采配を振るっている。それは運命的性格を持っているが、外から我々を動かしているのではなくて、我々の内なる決断や、意味付けの中に巣くっているのである。

近代技術の本性は立て－組にある。立て－組は発露の命運に従属している。この二つの命題は、例のよく口の端にのぼる、－技術は我々の時代の宿命であるという言説とは、およそ違ったことを言っているのである。その際宿命とは、もはや変えがたい成り行きの不可避なるものを意味している。

ところが技術の本性を沈思するとき、そこに私たちは立て－組を発露の命運として経験する。かくして私たちには、すでに命運の開闊の地に逗留するのであって、もはやここでは技術を盲目に追い廻したり、あるいは同じことだが、徒らに技術に反抗してあたかもそれが悪魔の仕業であるかのように断罪したりするような、鈍重な抑圧の中に監禁されることはない。逆に、技術の本性に適って自らをうち開くとき、私たちははからずも自由に解き放つ呼び求めに出会っていることに気づくであろう[29]。

我々は鎖につながれ、強制によって技術に参加させられているのではない。また、我々が技術を追い求めるという強迫観念にとらわれているのでもない。技術は我々の宿命ではない。我々には技術に向かう自由、自発性が働いている。その自由は、単純な選択の可能性ではない。宿命ではないが、そこには命運（Geschick）がある。我々を、近代技術にめぐり合わせている歴史（Geschichte）的な事情がある。そこには森の中の開かれた場所のように、別の方向に向かう可能性が開けている。

技術の本質は立て－組にある。立て－組の統率は命運に従属している。命運は人間をその都度露わな発きの一途上に就かせるのであるから、人間は従ってその途すがら、ただただ仕立ての中で露わに発かれたもののみを追求し促進し、そこからあらゆる規準をうけ取ろうとする可能性の瀬戸際を、絶えず歩み続けている。そのためにもう一つの可能性が閉ざされてしまうのである[30]。

この文章の意味は、歴史の成り行きとか世の中の仕組み、ふさわしさへの順応などに巻き込まれ、我々は近代技術の発掘・開発にしたがい、「立て－組」の支配下におかれているので、本当の生き方が見えなくなっているということである。

人間は、この「立て－組」の支配から逃れられない。その支配から、作為的に逃れることができないからである。しかしハイデガーは、「危険のあるところに救いもまた芽生える」というドイツの詩人ヘルダーリンの詩句を引用して、危険が極まるところに逆転の可能性があることを暗示する。

技術の本性はなんら技術的なことがらではない。それゆえ、技術への本質的な思念も、また技術との決定的な対決も、一方では技術の本性と類似しながらしかし他方では根本的に相違している領域の中で生起しなければならない。

かかる領域が芸術なのである。無論それは芸術的思念の方が、私たちの問うている真理の星局に関して自らを閉ざさない限りにおいてである[31]。

技術から芸術への人間の内面性の転換という地点に思い進めて、彼の『技術への問い』という講演は、終わっている。ハイデガーの哲学は、安易な人間中心主義に反省を促したといえる。

その技術観の特徴を、加藤尚武は次のように要約している。

①機械に対して、単に人間が主体性を、個人が自立性を取り戻すだけでは不十分で、同時にその人間が本来性を取り戻すのでなければならない。

②特定の人間や階級が、姿のない匿名性、非人格性を通じて、多数の人間を自分たちの利潤追求の手段とし、監視し、支配するのではなくて、その支配者もまた微発性という形のない仕組みの奴隷

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

となっており、一つの時代の文化、社会、人間が全体として人間存在の真実を喪失している。

③人間が自己を喪失して機械の部品となり、技術が自然の持つ奥深い真理性を破壊するのは、西洋とその影響を受けた文化全体の根本にかかわる大きな歴史的運命のなかの出来事であり、何らかの作為で解決のつく問題ではない[32]。

5．ハイデガーに対する批判－おわりにかえて－

これまでの論述により、ハイデガーの技術観に対する批判を試みたい[33]。ハイデガーの考えによれば、今日の世界に現存するものは「立て－組（Gestell）」という技術の本質の呼びかけに全面的に服従している。そこに現れるのは、単に計算可能な役立つもの（財）として次々と「立て」られるものであ。我々人間もまたそういう「立て－組」の一役を担って、役立つものを立てるべく立てられたに過ぎない。

このような技術観では、技術的制作活動の外に目的をおき、技術を目的のための手段であると見なすことも、また製作活動の始因を製作者に求めることも否定されている。つまり目的論的思考法も人間中心的思考法も拒否され、技術的活動がそれ自身の自発的展開において、現代世界の一切を動かし現出させているというのである。その意味で確かにこの見方は、技術的な行為の現実を他に基づけることなく、それ自身として見るという、我々の立場に近い。しかし、このようなハイデガーの技術観は、技術的な行為の全体性を、よく視野に収めたものといえるであろうか。

例えば、飛行機という技術的な生産物は、ハイデガーのいう役立つものという仕方で立てられたものと同時に、「個体」のあり方も呈示するものとして、我々に出会われることも現実に可能ではないか。飛行機で、外国出張している状況を考えてみたい[34]。

飛行機という現代技術の粋を結集した機械といえども、絶対の安全性を保証されることは不可能であるから、一つ一つの飛行機は何時でも墜落する可能性を持って飛んでいる。そのような可能性が現実化することなく、他ならぬこの飛行機で安全に再び今日故郷へ帰り着く幸運に我々が恵まれるとしたら、それはその当日の天と地との平穏な状態と、その飛行機の個性を心得て順調な飛行を取り運んだ特定の人々の協力に負うのである。さらに万一の墜落の可能性を今回は与えなかった何か目に見えぬものの働き、すなわち神の好意ともいうべきもののお陰である。

天、地、人々、神々という四者のこのような結集は、ハイデガーのいう「方域」としての世界である。飛行機は、このような世界がその都度恵まれた仕方で存在することではじめて、それぞれ固有な仕方でその存在の全体性を現出することができる。したがって飛行機という機械は、機械として単なる役立つものであると同時に、一つ一つが固有名によって指示されるべき個体としてその飛行を現実化しているといえる。

飛行機は、さらに多かれ少なかれ歴史的・政治的な役割を担っている。最新型の飛行機は、現代の美的感性を先導して、新しい様々なデザインに影響を及ぼす。これらの役割はすべて連関しあって、飛行機という個体の全体存在を形成している。もしこのような飛行機の存在を、目的論的にただ速く運搬するための技術的な手段と見たり、現代技術の本質から規定して、「立て－組」の呼びかけによって立てられただけの「役立つもの」に過ぎないと考えるなら、この飛行機という技術的生産物の現実のあり方についても、またそれを用いる行為的現実についても、その現実性が全く一面的に抽象化されてしまう。

我々は、強調された優先的な現象の仕方の陰で現前している具体的現実の多様な姿にこそ、眼を向ける努力をすべきであろう。技術的産物に過ぎないと見られているものも、時を経て、歴史と社会の文脈の中に入り、さらにそれが我々一人一人との個別的な関係を持つに至ると、単なる道具や機械であることを超え、一つ一つが固有な個体として現出する。

現在の世界に現前するものは、単なる役立つものであり、近代的世界の存在者は専ら対象であったと宣言するハイデガー的な存在理解の仕方は、抽象的・一面的であるばかりでなく、技術的世界の現実をありのままに見ることを妨げ、これを克服して行く道を技術的世界自身に求めることを不可能にする。

我々は、技術を克服するものを、技術的産物の個体化の方向に求めうると考える。しかし我々がすべての人に個人として接することが不可能なように、すべての事物をそれぞれ固有な個体として扱うこともできない。我々の前に現れる大部分の事物は、自然物であれ、人工物であれ、それらの属する類や種の特殊例である。それどころか、目的・手段関係の中で用いられる道具の存在は、その指示関係への適合性以外のあり方を本来必要としない。さらに、効率の良い大量生産を旨とする現代技術では、生産工程や生産物の個性化は、それ自身が生産の大きな阻害要因である。

こう見てくると、現代技術の中で個体の存在を求めることは、本質的に矛盾した願いであるといわねばならない。しかし、すでに述べたように、飛行機という最先端の技術的産物もその使用の具体的な現実におい

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

ては、明らかに一個の個体として扱われうる。

問題は、如何にして、どこまでその個体化を推し進めうるかである。その可能性を現代技術の世界一般として問うと同時に、我々日本の思想的・風土的伝統の中で問い求めることである。なぜなら、科学・技術の問題は、まさに日本の科学・技術として、今や世界に大きな影響を及ぼしているからである。

参考文献

（1）『アリストテレス全集13　ニコマコス倫理学』加藤信朗訳、（岩波書店、1973年）190頁。

（2）同前、188頁。

（3）M.Heidegger, Die Frage nach der Technik, in die Technik und die Kehre, Tübingen, 1962.

（4）a.a.O.S. 5

（5）a.a.O.S. 6

（6）a.a.O.S. 9

（7）ebenda

（8）ebenda

（9）a.a.O.S.11

（10）a.a.O.S.12

（11）a.a.O.S.13

（12）a.a.O.S.14

（13）a.a.O.S.15

（14）a.a.O.S.14－15

（15）a.a.O.S.16

（16）ebenda

（17）ebenda

（18）ebenda

（19）a.a.O.S.18

（20）a.a.O.S.20

（21）ebenda

（22）a.a.O.S.24

（23）ebenda

（24）a.a.O.S.17

（25）a.a.O.S.17－18

（26）『独話大辞典』（小学館、1985年）、890頁参照。

（27）古東哲明『ハイデガー＝存在神秘の哲学』（講談社、2002年）、246頁。

（28）a.a.O.S.20

（29）a.a.O.S.25

（30）a.a.O.S.25－26

（31）a.a.O.S.35

（32）加藤尚武『技術と人間の倫理』（NHK出版、1996年）、174－175頁。加藤は、Gestellを「微発性」と訳している。

（33）ハイデガーの技術観を批判したものに、望月太郎「もうひとつの現象学的技術批判の試み－ミシェル・アンリの技術批判－」、『技術の知と哲学の知』（世界思想社、1996年）所収がある。

また、サイバネティクスとの関係で論じものに、室井尚「ハイデガーとサイバネティクス」、『哲学問題としてのテクノロジー』（講談社、2000年）所収がある。

（34）竹市明弘「技術と技術を超えるもの」、『岩波講座転換期における人間7　技術とは』（岩波書店、1990年）、178頁以下参照。

NII-Electronic Library Service